平成 18 年 11 月 18 日

大久保啓次郎

勝　海舟の瘠我慢と行蔵に関する考察

――福澤諭吉の「瘠我慢の説」をめぐって――

はじめに

勝　海舟（1823～1899=明 32）と福澤諭吉（1835～1901=明 34）は、福澤が勝より丁度ひとまわり（１２歳）下であるが、二人は殆ど同時代を生きている。
勝は為政者であり福澤は思想家である。したがって、二人が共鳴して幕末から明治維新に活動していたなら、日本はもっと迅速に、近代的統一国家への道を歩んでいたかも知れない。
しかし二人は生涯の初めから終わりまで、水と油のように馬が合わなかった。

二人の最初の出会いは、1860 年に咸臨丸でアメリカに行った時である。
船内では、木村摂津守（1830～1901=明 34）・軍艦奉行は提督として、勝海舟は艦長として呼ばれていたが、実際には渡航に当たって、幕府は勝に昇格辞令を出さなかったので、勝の「身分格式」は軍艦操練所教授方頭取であり、長崎海軍伝習所の時と同じであった。（木村は軍艦奉行並から軍艦奉行に昇格した。）
その事が、勝は気に入らなかった。勝はそれより前、安政２年（1855）に長崎海軍伝習所に任命され、軍艦操練技術の習得に日夜腕を磨いていた。そこへ、安政４年（1857 年）に木村が伝習所長として赴任した。したがって、勝と木村はそれ以来の付き合いである。木村は勝の上司であるが、軍艦操練技術に関しては殆どゼロに等しい。

福澤は木村の「従者」という名目で咸臨丸に乗船出来た。若しも福澤が乗船していなければ、勝には他に推薦したい部下がいたらしい。当時の彼等の年齢は、勝が 37 歳で、木村が 30 歳、福澤が 25 歳であった。

年齢的にも自分より下で、軍艦技術も全く素人の木村が、上司面して咸臨丸を取り仕切っていた事が、勝には余程腹に据えかねたのであろう。それに福澤のように軍艦操練技術が全くないにも拘らず、彼が学者ぶった高慢ちきな態度をしていた事が、気に食わなかったにちがいない。

勝は船酔いを理由に、殆ど自室に閉じこもり寝込んでいた。木村が勝に何か相談に行っても、「お好きなように！」と素気無い返事をして取り合わなかった。

船内での態度は常に傍若無人であり、上司にも従順でないばかりか、部下の面倒見も良くなかった。時には癇癪を起こし、「バッテーラをおろせ、おれはこれからひとりで漕いで帰る」と怒号したらしい。

咸臨丸は、1860 年 1 月 19 日に浦賀を発ち、5 月 5 日に帰国する。この 100 数日間の道中で、福澤は勝と一緒に生活し、勝には控えめに応接し、木村が勝から嫌がらせをされるのを、黙って見てきた訳である。福澤のはらわたは、煮え繰り返り、勝に対する嫌悪感は、相当なものであったと推察される。

咸臨丸での最初の出会いにより、以後二人は、根深い確執の関係になる。

問題提起

「瘠我慢の説」執筆の動機

福澤は明治 24 年に、東海道興津のあたりを遊歩して、清見寺に参詣した。その境内には、維新の時の咸臨丸旧幕府艦隊員戦死者のための記念碑があり、その碑の背面に、「食人之食者死人之事」（人の食を食む者は、人の事に死す）＝（人に養われた事がある者は、命を捧げてでもその恩に報いるべきで、自己の利益に走ってはならない）と大書して、「従二位　榎本武揚」と、名が記してあった。

福澤はそれを見て非常に憤慨し、「榎本がしゃあしゃあと、このような事を書いて居られる義理ではあるまい」と言い、その年の 11 月 27 日に脱稿したのが、「瘠我慢の説」である、と伝えられている。　　（刊行は明治 34 年 1 月 1 日）

榎本武揚（1836～1908=明 41）は江戸開城の後、旧幕府艦隊を率いて脱走し、箱館五稜郭に立籠り、力尽きて降参した。脱走前の福澤との関係は、会えば挨拶する程度であったらしい。しかし榎本は福澤の妻・錦の遠縁の関係にあり、榎本の母親から懇願されて、福澤は榎本の助命運動に、東奔西走したのである。しかし出獄すると榎本は、福澤の意思に反して、明治政府に出仕し、諸大臣を歴任した。1890 年（明治 23 年）には、子爵になっている。

榎本は瘠我慢をしたが、（武士道の精神を遵守したが、）幸蔵（出処進退）を誤った、と福澤は「瘠我慢の説」で、榎本を厳しく糾弾したのである。

「瘠我慢の説」―勝の瘠我慢と行蔵に関する福澤の見解―

以上のように「瘠我慢の説」は、福澤が旧幕臣の死者記念碑の、背面に書かれた榎本の文章を見て感ずる所があり、執筆に踏み切った経緯があるが、榎本武揚と勝　海舟の二人の進退に関しては、多年来心に釈然としないものがあり、いずれ時節を見計らって、世間に公表しようと考えていた。

しかも一番論説したかった事は、勝の瘠我慢と行蔵に関してであり、榎本に関しては、二の次であった。

福澤は冒頭の「立国は私なり、公にあらざるなり」で、攻撃の火蓋を切る。

勝は、横井小楠の影響もあり、ある時期から「立国は、公でなければならず、私であってはならない」と考えていた。

しかし冒頭後の福澤の解説を読んでいくと、勝が考えて行動の指針としていた「私」&「公」と、福澤が言っている「私」&「公」とでは、意味合いが違うのである。　即ち、福澤が言っている「私」とは、国や藩であり、国民や藩民の集合体である。「公」とは、全世界であり、世界人民の集合体なのである。要するに福澤によれば、「私」は、徳川ではなくて、日本国民（日本国）であり、「公」は、日本国民（日本国）ではなく、世界人民（全世界）なのである。
これでは議論がかみ合わない事になる。

「立国」の考え方を述べた後に、福澤は「瘠我慢」の重要性を力説する。
「幕府軍は、兵数でも海軍力でも資金力でも、全てに於いて薩長軍よりも勝るのに、戦わずして敗れるのは、武士道の精神に反する行為である。不戦により100 万人の江戸庶民を、流血の惨事に巻き込まずに済んだその利益は、数千年も続いた日本武士道の気風を傷つけた事による損失を、償う事は出来ない。」

勝は、武士道精神に反する行為をしただけでなく、維新後は明治政府に出仕し、参議・海軍卿、枢密顧問官などに任じられ、その生涯の終わりには、正二位勲一等伯爵という高位高官にまでのぼった。

福澤は、
「・・後世子孫これを再演する勿れとの意を示して、断然政府の寵遇を辞し、官爵を捨て利禄をなげうち、単身去てその跡を隠すこともあらんには、世間の人も始めてその誠の在る所を知りてその清操に服し、旧政府崩壊の始末も真に氏の功名に帰する。・・即ち我輩の所望なれども、今その然らずして恰も国家の功臣を以て傲然自ら居るが如き、・・・ただに氏の私の為に惜しむのみならず、士人社会風教の為に深く悲しむ所の者なり。・・」

更に「我輩も氏の事業を軽軽看過するものにあらざれども、独り怪しむべきは、氏が維新の朝にさきの敵国の士人と並立て得得名利の地位に居るの一事なり。・・氏の如きは到底終わりを全うすべき人に非ず。・・」と糾弾し、
「勝氏は行蔵を誤まった」と辛辣に扱き下ろしている。

福澤から勝と榎本への手簡

明治 25 年 2 月 5 日に、福澤は勝と榎本に「瘠我慢の説」の草稿を各１冊と、手紙を添えて送り、草稿についての意見を求めている。

「小生多年来心に釈然たらざるものがあり、いずれ時節を見計らい世に公にし、世論に質し、天下後世のためにせんとする積りなので、ご意見を賜りたい。」

勝からの答書　（2 月 6 日）

「行蔵は我に存す、毀誉は他人の主張、我に与らず我に関せずと存候。
どなたに公表しようが毛頭依存はありません。送付された草稿は頂戴します。」

榎本からの答書　（2月５日）

「草稿に事実の相違、並びに小生の所見があれば云々、とありますが、昨今は特に多忙であり、いずれ愚見を申し述べます。」＊
＊　結局、その後に至っても、榎本からの答書はなかった。

木村摂津の守（芥舟）　と 栗本鋤雲（1822～1897=明 30）

福澤は、「瘠我慢の説」の草稿を脱稿直後に極秘で、親友の木村と栗本の二人に贈った。更に明治 29 年頃、紀州徳川家 15 代当主・徳川頼倫（1872～1925=大 15）が渡欧の時に随従の鎌田栄吉に託して贈った。
木村芥舟は、幕末期の幕臣。軍艦奉行。1868 年の戊辰戦争では、江戸城開城の事務処理を務めた。新政府からもその実力を評価されて、士官の誘いがあったが、木村はそれらを全て謝絶し、親友の福澤諭吉と交友しながら、詩文を読む生活を送った、と言われている。
栗本鋤雲は、幕末期の幕臣。外国奉行。徳川昭武の一行がパリに於ける万博博覧会を訪問していた時には、その補佐役を命じられフランスに渡った。そしてそこで、日本の大政奉還と江戸幕府の滅亡を知る。
1868 年にフランスより帰国する。鋤雲の才能は新政府からも評価されていたため、出仕の誘いがあったが、幕臣として幕府に忠誠を誓い、重用された恩があった鋤雲は、新政府に仕える事を潔しとせず、それを謝絶して隠退した。
1873 年に「報知新聞」の主筆を務め、明治時代にはジャーナリストとして活躍した。
以上のように、木村も栗本も出処進退が潔かったので、福澤が贈ってくれた「瘠我慢の説」を読んで大変感動したであろうことは、想像できる。
実際に、栗本は目が相当に悪く、本が読める状態ではなかったので、最初は福澤が朗読をしてあげたらしい。栗本は福澤の朗読を聞きながら、何度も涙を流したと言われている。その後自分でも手を当てながら何度も読み、感激した箇所には、朱筆を以て書き加えたそうである。
栗本氏の手許にあった原稿は、今日塾の図書館に保管されているらしい。

幕末から明治維新に於ける歴史的事実の観察

勝　海舟の足跡［ペリー来航（1853）～鳥羽・伏見の戦い（1868）］

維新変革の全コースの中で、多くの日本人を新しい統一国家を目指す運動へと駆り立てたのは、嘉永 6 年（1853） 6 月のペリー来航である。

ペリーから開港を要求されると、老中阿部正弘は幕府のみで鎖国を破る決断を嫌い、海防に関する意見書を幕臣はもとより、諸大名、町人から任侠の徒にいたるまで広く募集した。その中で幕臣海舟の意見書は最も優秀な部類に属し、阿部老中の目にとまることになる。そして幕府海防掛だった大久保忠寛（一翁）（1818～1888）の知遇を得て、立身の道を歩みだす。ペリー来航の時、海舟は満 30 才であった。それから明治維新（1868 年）に至る激動の 15 年の歴史に、自らの足跡を残す事になる。

安政 2 年（1855）に長崎海軍伝習所勤務を命ぜられ、安政 6 年（1859）まで足掛け 5 年間も長崎で過ごす。しかしこれが幸いして、海舟は「安政の大獄」と言われた政争に巻き込まれずに済んだ。この時期に、当時の薩摩藩主・島津斉彬の知遇を得る事が出来、後の海舟の行動に大きな影響を与える事になる。当時、西郷隆盛は島津斉彬に抜擢され、斉彬の薫陶を受け鍛えられていた。

1860 年に、咸臨丸でアメリカに行く。その時の様子は既述の通りである。

帰国後、文久 2 年（1862）の幕政改革で海軍に復帰し、軍艦奉行並に就任。

この頃、坂本龍馬(1835～1867 年)が海舟の自宅に訪ねて来て門下にはいる。一説によると、松平慶永―横井小楠ラインの紹介で、龍馬は海舟と会い、話を聞き、「理論明晰、龍馬恍然たり」で海舟に惚れこみ即座に師弟の約を結んだ。

元治元年(1864 年)5 月、海舟は軍艦奉行になり、同年設立の神戸海軍操練所では「一大共有の海局」を掲げ、幕府の海軍ではなく日本の海軍建設を目指し幕府は勿論、諸藩が持っている船もまたその人材もことごとくここに集めて、日本の軍備体制を一新しようとした。つまり、幕府が国内諸藩を鎮圧するために、最高の軍備を持っているという状態を一挙に叩き潰してしまおうとした。しかし幕府の保守派から睨まれ、1864 年 11 月に、海舟は軍艦奉行を罷免され、約 2 年間の蟄居生活を送る事になる。神戸海軍操練所も閉鎖されてしまった。

その 2 ヶ月前の 9 月 11 日に、海舟は西郷隆盛に初めて会っている。

海舟はここで西郷に、「幕府にはもう天下の政治をとりしきる力がないから、むしろ雄藩の尽力で国政を動かさなければならない」と論じた。そして暗に、薩長連合を示唆した。

西郷は驚いた。そして海舟の実践的な理論と知略に傾倒した。

ところで、海舟はいつ頃から、幕府の保守派と対立するようになったのか？

文久２年(1862)幕府内には、徳川慶喜の積極的開港・幕権擁護の方針に対して、もう一つの政治方針が絡み合っていた。それは、政事総裁職となった松平慶永の政治顧問たる横井小楠が考えていたものである。小楠によれば、幕府のこれまでの「私」の政治に対して、「公」の政治を確立しなければいけない。徳川幕府は徳川氏一個のために日本の全体を支配する方式をとっていた。徳川が天下を取った時のその体制を維持する事を至上目的として、一切の政治制度は組まれていた。したがって、小楠の目標は、幕府の政治を彼の言う「公」的なものに切り替えることであった。この二つの方針の流れの中で、勝は、大久保忠寛を媒介にして、松平―横井ラインの考え方に組みしたのである。

横井小楠と勝海舟とは、文久 2 年（1862）の後半期にしだいに深く許し合う仲となった。そうして海舟の方が小楠を先輩として尊敬していた。年も小楠の方が 14 歳上である。

このように海舟は、松平慶永―横井小楠ラインの側に立っていたが、この時点では、幕府を完全に見放してはいなかった。

文久 3 年(1863)末に京都で、薩摩の島津久永を中心として、松平慶永・山内容堂・伊達宗城らの公武合体・雄藩連合派の前藩主による、国内統一を目的とした参与会議が開かれようとしていた。この会議には議長格として徳川慶喜が加わる事になった。この会議は天皇が召集する形をとる。その限りでは、幕府と他の雄藩とは対等にならざるを得ない。

勝は、この参与会議に期待をかけていた。

しかし、参与会議では意見がまとまらず、翌年 3 月には会議体は解体した。会議を壊したのは、幕府側、主として徳川慶喜であった。慶喜は、海舟の希望とは正反対に、あくまで幕府の「私」を貫くことに終始したのである。

海舟は、この時点で一度、幕府を見放した。そして西郷との会談では、上述したように、幕府の統制力の欠如を訴えるのである。海舟はどうも、そうとう手厳しく幕府の内情を吐露したようである。

すぐに洩れはしなかっただろうが、外様の陪臣をつかまえて、「幕府はもうだめだ！」と放言する始末である。　それに、幕府の私権強化の方針と、海舟の「一大共有の海局」を目指す神戸操練所の方針とが、根本的に背馳している。

したがって、上述したように、1864 年 11 月 10 日にお役御免が申し渡され、役高２千石も召し上げられ、氷川の屋敷に逼塞しなければならなかった。
まかりまちがえば、切腹ものだったかもしれないあやうさである。

神戸海軍操練所も閉鎖されたが、幸いな事に、彼の意志を継ぐ坂本龍馬とその一党は、薩摩に身を寄せた。海舟が西郷に頼んだとも言われている。

このような状況の中で、慶応２年(1866)1 月、長州と薩摩との間に同盟が成立した。仲介をしたのは、勝海舟の愛弟子坂本龍馬である。

同盟の目的は明瞭に討幕であり、当面、長州が幕府の攻撃を受ければ、薩摩は全力をあげて長州を援護することになっていた。

薩長同盟が成立した年の５月 28 日、一年半ばかりの閑居の後、勝は突然城中に呼び出され、軍艦奉行に復帰する。８月に第二次長州征伐の停戦交渉を任される。大軍をもって長州藩領に攻め込もうとした幕府は、反対に長州側のためにさんざんに打ち破られていた。薩摩の援護がなかった事が主たる敗因である。

第二次長州征伐が開始されたのは６月であり、５月時点での幕府の方針は、「フランスに借金をし、軍艦７隻を廻してもらう。これが着き次第、第一に長州を征伐する、次に薩摩を討つ。そうすればもう幕府に口出しする大名はいなくなる。この時に大名領をことごとく削って郡県制度にしたい」である事を、海舟は、老中板倉勝静から聞かされ、意見を求められた。

海舟こう答えた。

「郡県制にすることは、いまや一つの統一国家として国際関係に入らなければならない時節だから、当然の方針だろう。しかし、そのための手続きとして、徳川氏が自分一家のために、他の諸大名をつぶして、みずから統一政権を掌握し、天下に号令しようなどと考えてはならない。真に日本の事を考えるなら、まず徳川氏がみずから倒れ、みずから領地を削って、国政を担当する能力のある者が、政権を担当するように、力を尽くすべきである。薩長を憎み、これを倒すなどとは、とんでもないことである。」

板倉は、海舟の意見を聞いて狼狽するだけで、なすところを知らなかった。

しかし、それから２ヶ月過ぎ、８月には第二次長州征伐での幕府軍の敗北は決定的となった。慶喜―板倉の構想は、完全に消滅しかかっている。

自分の考えが実現するかもしれないと、海舟は思った。

海舟だけでなく松平慶永（1828～1890=明 23）も同じことを考えた。幕府を廃止せよと言うのである。8 月 12 日に慶永が慶喜に忠告すべくまとめた条項には、

１、徳川家従来の制度を改め、諸藩へ命令等止められ、尾張・紀州両藩のようになる事。

１、幕府により置かれている所司代、守護職、町奉行等は、一切廃止する事。

１、兵庫開発・外国交際・諸侯統括・金禄貨幣・その他天下の大政一切、朝廷に返上する事。

等が含まれている。これは大政奉還論である。慶喜がこれだけの覚悟をした上で、諸侯を集め、その公論衆議によって長州問題をはじめ当面の事を決めていこうというのだ。さしあたって戦闘状態にある長州との停戦交渉には、勝海舟を使えという知恵も、やはり松平慶永から出ている。

慶喜は、しぶしぶこの申し出をのんだ。その上で交渉を海舟に任せたのである。したがって海舟も慶喜が自分の説を受け入れたと思った。

海舟は、長州との停戦交渉に、この「大政奉還論」を説いた。幕府がみずからを投げ出し、その上で朝廷の前での公論衆議によって今後の事を決めたいと言ったのだ。それを海舟の口から伝えたため、長州も信用し、談判は簡単にまとまったのである。しかし、交渉を終えて帰って来ると、情勢は又も一変していた。慶喜が裏切ったのである。

幕府は慶永の提案による「大政奉還」など、やる気がなかったのである。
海舟が出発した後で、幕府は、海舟の応接とは別に、朝廷から休戦命令の勅書を出させた。これでは、海舟の立場はなくなるし、長州も怒りを爆発させた。
海舟は大阪で辞表を出し江戸へ帰った。しかし軍艦奉行の職務は据え置かれた。

勝海舟の大政奉還論が、徳川慶喜の裏切りによって敗れてから丁度１年後の慶応３年(1867)10 月 14 日、土佐の山内容堂の提案により、慶喜は大政を奉還したのである。慶喜や容堂には、実質的な政権は、再び徳川に戻ってくるとの自信があった。外交権などは、はじめから手放そうとしていなかった。

これに対し、薩摩や長州の討幕派勢力は、偽の大政奉還には惑わされず、王政復古のクーデタでこれに応じた。徳川氏を盟主とする諸侯会議ではなくて、天皇が親政をするというのである。結局のところ、徳川幕府と徳川氏という大封建領主を武力で倒し、それと共に諸侯を廃止する方向へ進む意外に、新しい国家を作る道はなかったのである。

海舟は、薩長の討幕派によるクーデタに対して、幕府としては兵を出さず、あくまで大政奉還を貫き通す事が、慶喜にとって有利であり、海舟にとっても理想の線まで近づける唯一の戦法である、と考えた。
したがって 12 月 23 日に登城して、老中格海軍総裁の稲葉正巳に、兵を出さぬように説いた。
しかし、稲葉は相手にしない。あなたは薩長の手先だから罷免しろという意見が強い。しばらく時の来るのを待ってくれぬか、と言うのである。海舟は憤然として辞表を出した。

鳥羽・伏見で一発の砲声がとどろいた時に、慶喜の構想が消えると共に、海舟の最後の望みも消えた。
海舟が鳥羽・伏見の開戦と幕府敗北の報とを一緒に聞いたのは、明治元年(1868)の正月 11 日のことである。この日、政治にも軍事にも敗れた将軍慶喜が、軍艦開陽丸で江戸へ帰ってきた。海舟は、知らせを受けて、早朝、海軍所まで出迎える。失意の将軍と失意の海舟との出会いである。

正月 17 日、海舟は、海軍奉行並を命ぜられた。ついで 23 日には、陸軍総裁にあげられる。海舟はついに幕閣の最高幹部となったのである。会計総裁は、かって海舟登用のきっかけを作ってくれた大久保忠寛である。

海舟の努力は続く。「まずこちらからは絶対に戦争をしないという体制を作ら

なければならない。徳川の「私」の巣窟を一掃しなければならない。それは、この場合主戦論を断固排除して、徹底的な恭順論を貫く以外にない。それも、勝利の見込みを持ちながら恭順することが、その「公」を光彩陸離たるものにするにちがいない。」

海舟の努力によって、慶喜及び徳川家首脳部の腹は、2 月 11 日に最終的に決まった。小栗忠順をはじめ永井尚志などの主戦派はみなそれまでに罷免され、前京都守護食の松平容保と前京都所司代の松平定敬もすでに登城を禁じられていた。その夜、慶喜は群臣に自分の考えを説明した。

こうして海舟は、徳川氏を「公」に転化するための準備を終えた。この翌日、慶喜は江戸城を出て、上野寛永寺の大慈院に蟄居する。

江戸無血開城談判の真相

駿府で合議した官軍の大総督府は、3 月 6 日に 3 月 15 日を期して江戸城の総攻撃にとりかかるよう、命令を発した。山岡鉄舟(1836～1888=明 22)が、海舟の手紙を携えて江戸を出発したのは、奇しくも、その攻撃の命令が出された日と同じ 3 月 6 日の早朝だった。3 月 9 日官軍の駐留する駿府にたどり着き、単身で西郷と面談した。

西郷との談判において江戸開城の基本条件について合意を取りける事に成功。

山岡が西郷から受け取ってきた総督府の徳川所処置案は次の通り。

１．慶喜を、恭順の意を以て、備前藩へ預ける事。
１．城を明け渡す事。
１．軍艦を残らず全て引き渡す事。
１．武器を一切引き渡す事。
１．城内の居住者は、向島に移動し、謹慎する事。
１．慶喜の妄挙を助けたものを、厳重に取り調べ、厳重に処罰する事。

海舟はこの書付について、大久保忠寛らと協議した。そして幕府側の案を持って、西郷と面会した。会談は、明治元年 3 月 13 日と 14 日の 2 回にわたって行われた。場所は、江戸の薩摩屋敷。13 日の会談は、和宮の処置が話しあわれただけで、14 日に、同僚たちと協議してまとめてあった嘆願書を提出した。

山岡が持ち帰った総督府の沙汰書の各条項について、修正を求めたものである。

１．隠居の上、水戸で謹慎させる。
１．城を明け渡した後、田安家に預ける。
１．軍艦・武器に関しては、しばらく封印しておき、将来寛大な処置が決まって官軍に引き渡す時に、徳川方に相当数を残す。
１．城内住居の家臣は、場外に引越し謹慎する。

１．慶喜の妄挙を助けた者共については、寛大な処置をお願いする。特に死刑はないように願いたい。

こうしてみると、官軍側の要求と、海舟の持参した嘆願書との間には、相当のひらきがある。しかし、西郷は譲歩して京都に持ち帰った。

京都側の回答は、4 月 4 日、勅使によって江戸城にもたらされた。城の預かり手を、田安家の代わりに尾張徳川家としたことと、武器・軍艦の処置手続きが封印ではなく、一度官軍に引き渡した後に、徳川家に返すとなっている他は、海舟の要求がすべていれられている。明け渡しは 4 月 11 日と決まった。江戸開城は、無事に済んだ。

官軍は、なぜこのように譲歩したのだろうか。その真相に迫ってみる。

官軍への嘆願書が出来上がると、海舟は、イギリス公使パークスの通訳官アーネスト・サトウを、赤坂氷川町の自宅に招き、密談している。嘆願書の内容については、サトウからパークスに報告されたであろう事は、想像出来る。

3 月 13 日横浜では、総督府参謀の長州藩士・木梨精一郎とパークスとの間で会談が行われていた。パークスは意外にも、官軍の「江戸討ち入り」に不賛成である旨を、率直に名言したのである。この会見でパークスは木梨に言った。

「徳川慶喜が恭順の意を表わして謹慎している以上、なにも慶喜を死にまで追い詰める必要はないから、是非とも助命されたい。江戸城を掌中におさめれば、朝廷の政治目的は達成されるはずである。これは万国公法の理にかなったことである。」

官軍の最大の支持者だったはずの英国大使から、このように明確な意志が表明された以上、もはや官軍は「江戸討ち入り」を強行することが、出来なくなったも同様であった。

ところで海舟は、おそらく事前に、木梨・パークス会談が行われることを知っていたものと思われる。3 月 13 日の西郷との会談を儀礼的なものにとどめ、本会議を翌日に持ち越したのは、並行して行われている木梨・パークス会談の結果を確かめてから、西郷との談判にあたろうとしたにちがいないからである。

海舟は、木梨参謀に向かってパークスがどんな事を言うかというところまで、あるいは読めていたかもしれない。そしてこの会談についての情報は、ほぼ確実にサトウ経由で海舟のもとにもたらされていた。彼は、西郷がとどのつまりは譲歩せざるを得ないことを見通して、第二次会談に臨む事が出来たのである。

この交渉は、したがって西郷の完敗であり、海舟の完勝に終わった。

このように、海舟は西郷との交渉を有利に進めるために、パークスを利用したが、交渉が決裂した場合の事も考えて、手を打っていた。自分の手で江戸を焦土と化す作戦がそれである。

海舟は、それから毎日四つ手籠に乗って、「いわゆるならずもの」「あの仲間

で親分といわれるものども」つまり、新門辰五郎のような任侠の親分や火消しの頭などを訪ねて廻った。海舟が後年語っているところによると、
「[いざという時には、合図をするので、江戸中を火の海にしてくれ！]というと、[へ一分かりました。このお顔がお入用なら、何時でご用に立てます]というふうで、その胸のさばけておるところは、実に感心なものだった。」
　また、房総に舟を集めて、火が見えたらすぐに江戸川に入れ、片端から難民を救うようにとの手配もした。
　さらには、サトウ経由でパークスに、最悪の時は慶喜をイギリスに亡命させる事まで、依頼していたと言われる。
　結果からみると、西郷との会談が成功したので、この秘策はついに日の目を見なかった。

徳川家処遇の談判についての顛末

　江戸無血開城は実現したが、海舟には、一大名としての徳川家の処遇という課題が残っていた。官軍は、旧幕府の無血接収が無事に済めば、慶喜の恭順の実績によって、徳川家の最終的な処遇を決めようと考えていた。しかし徳川内部の強硬分子たちは、その方針がはっきりするまでは、全面的な武装解除に応じるわけにはいかないと考えていた。朝廷側は旧国家を武装解除するつもりでも、徳川方は、それでは一大名としての徳川家までが武装解除されると考えざるをえないのである。混乱の原因は、旧国家と徳川家との区別が判然としないところにあった。海舟はそこのところを、腹芸で解決するつもりでいた。幕府解体について徹底的に恭順を貫けば、徳川家を潰す大義名分はなくなり、おのずと、旧国家と区別された徳川家の姿が現れてくるいう見通しである。
西郷もその腹芸に応じていた。
　そうこうしている間に、官軍の中から、西郷の海舟との交渉は甘すぎるという意見が出てきた。具体的にいえば、肥前の江藤新平には、西郷がこともあろうに、海舟によって思う存分に手玉にとられているように見えたのである。
　ここで一見して明らかな事は、4 月 10 日の京都会議を通じて、西郷の権威が急速に失墜したことである。西郷は官軍の中で孤立するようになった。西郷の孤立とは、とりもなおさず、海舟の方策の挫折である。そして朝廷内部の権力の中心が、薩摩から長州に少しだけ移行した。この事は、江戸軍政の中心が、薩摩の西郷から長州の大村益次郎に移行した事とも、おそらく深い関係がある。
　この間、徳川処分の発表はどんどんのばされた。
　しかしこの手づまりは、上野の彰義隊征伐で打破された。江戸で海舟にふりまわされた傾向のある大総督府に代わって、軍防事務局判事大村益次郎や関東監察使三条実美が前面に出てくる。

京都で、徳川処分の腹案をかためてきた三条は、4 月 29 日、徳川の家を田安亀之助に継がせることを発表しただけで、居城や禄高については、伏せておき、5 月 15 日、10 時間の戦闘で彰義隊を叩き潰した後になって、はじめて、居城は駿府で、禄高は 70 万石を支給すると発表した。居城は江戸で、悪くても旧高の半分の 200 万石はもらえるだろう、と思っていた海舟にとっては、大きな打撃であった。

戦争の指揮をしたのは、もちろん大村益次郎。この大阪・緒方洪庵塾頭出身の兵学者は、一度も海舟の影響下に入ったことがなく、官軍中で海舟に劣等感をもたない唯一の知識人だった。大村益次郎の成功は、とりもなおさず西郷隆盛の江戸占拠政策がいかに生ぬるいものであったかを証明することになる。それはまた官軍側から見て、西郷をいいように操っていた勝海舟という人物が、いかに「奸智」にたけた人物であるかを裏書する事にもなる。

徳川家処遇の交渉については、海舟の完敗であった。

明治維新以前に於ける勝海舟の功績

彰義隊戦争は、江戸総攻撃の代理戦争となった。江戸総攻撃をやっていれば、旧国家とともに徳川家そのものも完全に消滅しただろう。そのかわりに犠牲は大きく、江戸は焼け、もしかすると諸外国の介入を招いたかもしれない。
海舟はその戦争を殆ど独力で喰いとめたのである。

海舟は、徳川幕府を旧国家と徳川家とに分離し、その論法を新政府が受け入れる事を条件として、みずから旧国家を解体することに全力をあげた。そうして新しい統一日本への展望と、幕臣としての地位の矛盾に悩みながら、多年蓄積してきた海舟の政治的実力が、この困難な役割を殆ど一人で担当することを、可能ならしめたのである。海舟は、平和裡に、徳川が先頭に立って「公議」によって、郡県制を実現する事を構想していた。その構想を持っていればこそ、それに達する手段として、まず小栗忠順――徳川慶喜の、幕府中心主義の方式を退けた海舟は、ついで、武力倒幕方式の修正を要求したのである。

明治維新以後に於ける勝海舟の行蔵

維新後、勝海舟は、明治 6 年に参議・海軍卿、明治 20 年に伯爵、翌明治 21 年４月に枢密顧問官に任じられ、10 月に正三位に登り、明治 22 年（憲法発布の年）12 月に勲一等瑞宝章を賜った。　その後、勲一等旭日大綬章を授けられ、正二位に叙せられた。

福澤諭吉は「瘠我慢の説」で、勝海舟の行蔵を批判している。

「しかし旧幕臣グループを、今後も統制していかなければならない立場にいる海舟にとっては、海舟が高位高官に任じられる事により、それだけこのグル

ープ統制力は、隠然と充実したのである。」　（江藤淳著[海舟余波]）
「実際、明治 7 年の佐賀の乱以降、熊本神風連の乱、萩の乱、秋月の乱、西南戦争と、氏族の反乱が相次いだが、これらはすべて官軍側の内部抗争にすぎなかった。この間にあって、最大の潜在的野党である旧幕臣グループは、戊辰いらい 30 年間、慶喜とともに異常なまでの沈黙を守り続けた。

最初の、そしておそらくは最大の危機は、明治 10 年の西南戦争の時にやってきた。海舟と西郷はもとより相重んじた仲であり、江戸開城のために反対の陣営に属しながら協力しあった間柄である。もし海舟が旧幕府を扇動し、海軍にも働きかけて西郷と呼応したならば、どのような事態が生じていたかは、容易に想像し得るところであろう。しかし海舟は起たなかった。起たないどころか、連日連夜奔走して、旧幕臣が反乱軍に投ずるのを未然に防いでまわった。

その結果、旧幕臣からは、反乱軍に身を投じたものはいなかった。整然と統制し力を抑制して、官と薩との間にある中立勢力たる旧幕臣グループの、隠然たる力を示す事、これこそ明治10年の危機に当たって海舟が試みた事であった。

こう見て来ると、海舟が維新以後も一貫して意図し、そのために「瘠我慢」してきたのが、旧幕臣の一糸乱れぬ統制であった事は明らかである。このことに、戊辰の時には失敗したが、明治 10 年の際には見事成功したのである。」

このように、海舟は西南戦争では、西郷に救いの手を差し伸べなかったが、明治 12 年 6 月、南葛飾郡浄光寺境内に、私費で、西郷の記念碑を建立したり、西郷の遺児寅太郎のために、洋行留学費を宮中から出させる為に奔走したり、西郷のために尽力している。

海舟は、旧幕臣グループを統制しただけでなく、グループの生活支援に尽力した。徳川一門及び旧幕臣からなる「徳川共同体」の世話役を務め、豪商から献金させ、これを元手に「徳川銀行」ともいうべき金融機関を設けた。頭取格の元勘定奉行溝口勝如をはじめ旧幕臣がその事務をとり、海舟の目利きによって、貸付の対象となる人物・物件金額が決められた。海舟がこのような金融機関を始めた目的は、まず旧幕臣の経済的救済と、つぎに徳川家の経済的安定であった。旧幕臣は他の諸藩士にくらべて、経済的没落が早くやって来た。

とにかくこの金融機関が「徳川共同体」の団結を保持し、その内部に於ける海舟の地位を固めた意義は大きかった。

明治 13 年には、東照宮の保存を目的とする「保晃会」を設立した。海舟は、徳川宗家をはじめ旧御三家・越前松平家などから資金を集めて保晃会の基金とし、「徳川共同体」の精神的支柱にした。

また海舟は、徳川慶喜に対する忠誠心から、慶喜を感涙させる二大事業を行った。一つは、海舟が没後、爵位を「徳川氏に奉還したい」として慶喜の末子（10 男）精（くわし）を養嗣子に迎え、勝家を相続させた事である。

海舟の意向を聞いた時、慶喜は「勝は自分に対して怨みでもして居るかと思ったに、夫迄信切に思って居て呉れるか」と言って涙にむせんだという。
　もう一つは、旧主徳川慶喜と皇室との和解の儀式を執り行った事である。
それは、明治 31 年 3 月 2 日に実現した。
　この日、徳川慶喜は、かって自分の居城であった江戸城、つまり宮城に維新以来実に 30 年ぶりで参内した。彼は今や還暦を過ぎ、その広い額には、静岡閑居30年の苦悩が、深いしわになって刻みつけられていた。彼を招いた主人役は、いうまでもなく明治天皇である。慶喜は、（かって彼を「朝敵」と呼び、その生命を要求されようとしたこともある）天皇の前に、深々と頭を下げた。
天皇もまた、この時既に 40 代の半ばを超えておられた。
　謁見が終わると、天皇は席を寝殿に移され、侍従たちも遠ざけられて、ただ皇后のみが臨御されるという和やかな水入らずで、慶喜に酒肴を賜った。皇后は御手ずからお酌をされ、慶喜はこの厚遇に恐縮した。
　この和解の儀式を周旋したのは、表向きは有栖川宮威仁親王ということになっていたが、実は伯爵勝海舟であった。
　参内の翌日に、慶喜は海舟を訪ね、事の次第を報告され、うれし涙を流されたということである。
海舟も、「おれも生きている甲斐があった」と思って、覚えず涙がこぼれた。

勝海舟の瘠我慢と行蔵に関する私的見解

　これまで、明治維新前後の歴史的事実を観察し、その中で、海舟の考え方や行動を確認した。ペリー来航以来、幕府及び雄藩の改革的な人達は、それぞれの立場で、近代的統一国家の実現を目指して、行動してきた。
　海舟も幕臣という立場で、まず海軍の建設が急務であると考える。但しそれは幕府の海軍ではなく、日本の海軍でなければならないと、明確に方針を打ち出す。しかし幕府の中には、公武合体後も、（あるいは、大政奉還後も、）幕府（徳川）主導の統一国家を目指す徳川慶喜派と、日本代表主導の統一国家を目指す松平慶永―横井小楠派の二つの流れがあった。海舟は大久保忠寛（一翁）と共に、慶永―小楠派の考え方に組みしていた。
　その状況下で、慶永と海舟は何度も慶喜に接触し、「統一国家設立には、徳川という「私」を捨て、日本という「公」を取るべきである」と迫り、その都度承認されるが、すぐ裏切られてきた。
　まず「参与会議」で裏切られ、次いで「第二次長州征伐の停戦交渉」で裏切られた。慶喜には、幕府主導で、統一国家を築く自信が、あったのだろうか。
　しかし、鳥羽・伏見の戦いで敗れた後、慶喜は恭順の意を表わすようになる。

そして官軍との江戸城決戦にあたっては、慶喜自身が主戦論を排除して、恭順論を貫いたのである。1868 年 2 月 11 日、慶喜を含む徳川家首脳部の会議で、最終的に、慶喜の恭順、徹底抗戦排除の方針が決まった。
これに伴い、小栗忠順はじめ永井尚志などの主戦派は、全員罷免された。
　このような手順を踏んで、海舟は西郷と交渉に当たったのである。江戸無血開城談判は、決して海舟の独り相撲ではなかった。
　実際に戦争になった場合、幕府側が官軍に負けるとは限らなかった。圧倒的な海軍力、武器、兵力など、薩長に勝るとも劣るものではなかった。但し、戦闘意欲というか、兵士の士気においては、はるかに劣っていた。
　いずれにしても、戦争に負けて焦土と化しても困るが、若しも勝利して、徳川幕府が息を吹き返すのは、近代的統一国家を目指す海舟にとっては、もっと困る事であった。
　交渉に当たっての周到な準備、戦争になった場合の方策等々、海舟は万全を期したと思う。それでも、江戸無血開城は、武士道精神に背いた事になるのか？
明治維新以降も、徳川慶喜を始め徳川家、そして幕臣たちに、経済的援助活動を行い、慶喜の末子（精＝くわし）を勝家の相続人としたり、慶喜と明治天皇との和解に尽力したりして、武士道精神の「仁」と「忠義」を貫いたと考える。
　海舟は、維新前に何度も慶喜に裏切られても、「瘠我慢」をしたのである。
そして維新後は、徳川家及び旧幕臣のために、粉骨砕身「瘠我慢」してきた。
維新以後の勝海舟の行蔵に関して、江藤淳著「海舟余波」によれば、「勝海舟が、高位高官の地位に居る事は、旧幕臣グループを統制していく上で、極めて重要な事であった。」という事になるのだが、いささか弁解じみているように思える。
いずれにしても、海舟の判断であり、勝海舟の品格が問われるところである。

★　　ちなみに、旧幕府の幹部クラスの人達の行蔵（進退）を調べて見る。
◎　海舟と同じ思想で、行動も共にした松平慶永は、維新後、内国事務総裁、議定などを勤めたが、明治 3 年から一切の官職を去って著述に専念し、名著「逸事史補」を残して明治 23 年に 62 歳で没した。
○　海舟の上司でもあった大久保忠寛は、維新後、東京府の第 5 代知事になったが、旧幕臣を意識して政府とは常に距離を置いていたと言われている。
明治２０年に子爵に任ぜられ、明治 21 年に 70 歳で死去した。
○　江戸開城で活躍した山岡鉄舟は、維新後徳川家達に従い、駿府に下ったが、明治 4 年に新政府に出仕。静岡県＆茨城県参事、伊万里県権令などを歴任。
西郷のたっての依頼により、10 年間（明治 5 年～15 年）の約束で侍従として明治天皇に仕える。明治 15 年には公約通り辞任。しかし、功績により子爵に任ぜられた。明治 16 年、維新に殉じた人々の菩提を弔うため、台東区谷中に

普門山全生庵を建立した。明治 21 年胃癌で没。享年 52 歳。

◎　将軍慶喜の下で、最後の老中を勤めた板倉勝静（1823～1889=明 22）と小笠原長行（1822～1891=明 24）はどうであったか？二人とも五稜郭まで行き官軍と戦った後降伏。維新後は二人とも隠棲生活を送った。
板倉は、晩年上野東照宮の祀官となった。

◎　京都守護職を勤めた松平保容（1836～1893=明 26）は会津戦争で降伏した後、東京で蟄居生活。蟄居を許された後、明治 13 年に日光東照宮の宮司となった。

◎　京都所司代を勤めた松平定敬（1846～1908=明 41）は箱館戦争に参加した後、箱館決戦を前に箱館を去り、尾張藩に身柄を預けられた。明治 29 年に兄の保容の後を継いで、日光東照宮の宮司となった。

★　　箱館戦争で五稜郭に立て籠もり、最後まで官軍と徹底抗戦した後、降伏した連中の行蔵は、どうであったろうか？

×　蝦夷共和国の総裁だった榎本武揚は、明治 5 年に特赦出獄後、新政府に出仕、海軍中将・駐露特命全権公使を任じられた。帰国後は外務大臣、海軍卿、などを歴任し、内閣制度の成立後は 6 度の入閣で、逓信大臣、外務大臣、文部大臣、農商務大臣などを歴任した。子爵。明治 41 年 72 歳で死去。

◎　松平太郎は、蝦夷共和国の副総裁。箱館戦争降伏後は、牢獄生活を経て明治 5 年に釈放され、新政府に開拓使御用係・開拓使五等出仕・箱館在勤を命じられたが、翌年辞任した。その後貿易商を営む。明 42 年病死。享年 71 歳。

●　大鳥圭介は、蝦夷共和国の陸軍奉行。明治 5 年に出獄後、新政府に出仕し、欧米を視察。帰国後は工部大学校長、元老院議官などを経て第三代学習院院長。明治 22 年駐清国特命全権大使兼朝鮮公使。その後枢密顧問官も務めた。男爵。明治 44 年 78 歳で死去。

◎　荒井郁之助は、蝦夷共和国の海軍奉行。明治 5 年に出獄後、榎本らと共に北海道開拓使として新政府に出仕。明治 9 年に辞任して農学校・女学校校長を勤める。気象学・翻訳に励み、明治 23 年には初代中央気象台長に就任。明治 27 年、正五位を賜る。明治 42 年糖尿病で永眠。享年 73 歳。

○　永井尚志は、蝦夷共和国の箱館奉行。明治 5 年に出獄後、新政府に出仕。開拓使御用係、左院小議官を経て、明治 8 年元老院権大書記官。明治 24 年 75 歳で死去

◎　沢太郎座左衛門は、蝦夷共和国の開拓奉行。明治 5 年に出獄後、新政府に出仕。開拓使御用係を経て海軍兵学寮に勤務。兵学大教授を経て、15 年に兵学校教務副総理、18 年に海軍一等教官となる。19 年に辞職した。教育者として多くの将校を育て、海軍創設に貢献した。一方で自身の爵位を辞退し、正月の屠蘇や松飾りの祝いを避けて、毎年東京三ノ輪の円通寺においては、幕臣の戊辰戦争戦没者のために法要を行っていた。明治 31 年没。享年 63 歳。

◎　人見太郎は、蝦夷共和国の松前奉行。明治 5 年に出獄後、茨城県令などに任命された。その後実業界に身を投じる。明治 30 年代よりたびたび史談会に出席し、談話を残している。大正 11 年死去。享年 79 歳。

以上 14 人の旧幕府・幹部クラス及び五稜郭での投降者の出処進退（行蔵）を観察して見ると、たとえ政府に出仕しても数年後に辞任したり、政府とは一定の距離を置いており、進退を誤まったと思われる者は、榎本武揚しかいない。

したがって、榎本武揚については、福澤諭吉が「瘠我慢の説」で厳しく糾弾している通りである。福澤曰く「無為無策の伴食大臣。二君に仕えるという、武士にあるまじき行動をとった、典型的なオポチュニスト。挙句は、かっての敵から爵位を授けられて嬉々としている[瘠我慢]を知らぬ男」。

話を勝海舟に戻そう。

海舟の基本的な考え（近代的統一国家の確立）、江戸を戦禍から守った事、維新後の徳川慶喜に対する忠誠心、旧幕臣に対する経済的配慮、等々を考慮しても、戦わずして降参した事は、三河武士の精神、武士道という「規範」には背く。

官位については、明治 6 年に参議兼海軍卿に任じられるが、明治 8 年には、辞表を出して依願免官となっている。明治 21 年に枢密顧問官となっているが、他の旧幕臣の官位から考えて許容範囲であろう。問題は爵位である。

「明治 20 年、賞勲局より子爵に叙するという内命があった時、彼は、

[今までは人並みの身と思いしが
五尺に足らぬししゃくなりとは]

という嘲弄的な狂歌を吟じて辞退の意を諷し、結局伯爵に叙せられた。」（江藤淳著海舟余波）と、言われている。

これでは、子爵を辞退するどころか、伯爵を要求しているようなものだ。「命もいらず、名もいらず、官位も金も要らぬ」と詠った、西郷隆盛の品格と勝海舟の品格とでは、[月とすっぽん]くらいの落差がある。

おわりに

「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」という諺があるが、勝　海舟と福澤諭吉との確執が、どれだけ凄まじかったかは、福澤諭吉著「瘠我慢の説」での舌鋒鋭い論調―研ぎ澄まされた刀で切り込むような論調―の文章から容易に想像出来る。二人の確執は、万延元年の咸臨丸での最初の出会いから始まるが、二人の出会いは、これが最初で最後ではなかった。

こともあろうに、福澤が勝の自宅に行き、お金の無心をしているのである。「福澤諭吉全集 17 巻書翰集」268 大久保一翁宛　の書翰によれば、明治 12 年 4

月 11 日に、福澤が赤坂氷川の勝宅を訪問し、慶応義塾維持資金借用のお願いをしている。勝は「徳川銀行」の元締めをしていたので、潤沢な資金を保有していた。しかし、「旧幕臣の生活資金なので・・・」という理由で断られる。

三回目の出会いは、明治 18 年 4 月に芝紅葉館で、洋楽家某氏の 27 回忌法要の時である。この時も勝から、維新革命に纏わる不愉快な話を聞かされている。

この三度の出会いが起爆剤となり、榎本武揚という触媒の助けを借りて、明治 24 年 11 月に「瘠我慢の説」となって、爆発することになる。

明治１８年以降二人が再開する事はなかったが、日本の対外政策でも、二人の考えは違っていた。例えば、理由はともあれ、日清戦争に関しては、福澤は賛成し積極的に政府を支持したが、勝は日清戦争反対論者であった。

勝は「大東亜共栄圏」のような構想を持っていて、日本が中国や朝鮮と提携し、アジアの盟主になるべきである、と主張していた。
特に日中友好論者であった。又、朝鮮や中国に人脈をもっており、大院君、金玉均、朴泳孝、李鴻章、丁汝昌など、多くの知人と接していた。

国内問題では、勝は松方正義に好意を寄せていた。松方の財政政策にどれだけ関心があったか定かでないが、明治 29 年に第二次松方内閣が成立すると、松方首相を官邸に訪い、自分の意見を述べるなど、松方内閣の顧問をもって自ら任じていた。又、松方もよく海舟邸を訪問しては、「ご高説」を拝聴していた。

一方、福澤は、大隈重信とは盟友であり、大隈の財政政策は支持したが、
松方の財政政策には批判的であった。ここでも勝と福澤の好みが対照的なのは、興味深いところである。

［参考文献］

１．福澤諭吉著作集　第９巻　丁丑公論　瘠我慢の説　　慶応義塾大学出版会
２．勝　海舟　　松浦　玲著　　中央新書
３．勝　海舟　　石井　孝著　　吉川弘文館
４．海舟余波　　江藤　淳著　　文芸春秋
５．氷川清話　　勝　海舟著　　講談社学術文庫
６．海舟座談　　岩本善治編　　岩波文庫
７．福澤諭吉論の百年　　西川俊作・松崎欣一編　　慶応義塾大学出版会
８．西郷隆盛（上・下）　井上　清著　　中央新書
９．大久保一翁　　松岡英夫著　　中央新書
10. 坂本龍馬　　池田敬正著　　中央新書
11. 徳川慶喜　　松浦　玲著　　中央新書
12. 武士道　　新渡戸稲造著　矢内原忠雄訳　　岩波文庫